

吉田松陰研究の現在——吉田松陰を外から見る——

高橋 文博

このパネルセッションのタイトルは「吉田松陰研究の現在」となっているので、これだけみると、吉田松陰研究の現在の状況を全体的に検討するかのようと思われる。実は

そうではない。サブタイトルが示すように、ここで報告されたのは、内容的にいつて、かなり限定された時点における吉田松陰の対外観にかかわるものである。だから、これによって、吉田松陰研究の現在と称するのは僭越であるかもしれない。

とはいえ、これらの報告が、吉田松陰研究において、新しい状況を開いたことも確かなのである。松陰の対外観に集中して議論の場を設定したことだけでも重要な意義があるだろう。だが、わたくしの考えるところでは、このセッ

ションの意義は別のところにある。それは、松陰を外から見るという態度のことである。

陶徳氏は、松陰の「投夷書」の原本をアメリカのエル大学へ出かけて調査した結果を報告された。外国に存在する日本思想史文献資料によって、松陰を見るのである。

郭連友氏は、太平天国の乱に関する認識が松陰の思想に变化を生じた可能性を指摘する。外国の事件を通して松陰を見るのである。

桐原健真氏の場合はどうか。桐原氏は、白旗が松陰においてどういう意味をもったのかを問うている。白旗の意味が主題的に問われているのであって、やはり、白旗を介して外から松陰をみているのである。

ここに共通しているのは、資料であれ、事件であれ、また事象であれ、何か外なるものを立てて、それから松陰を見るかどうかという視線である。松陰の自己を主体として立てて、その主体が外なるものに如何に対応したか、また、その対応において主体が如何なる変容を示したかという仕方、松陰の自己を見とどけようとする視線ではない。

そして、この視線は、松陰の自己を主体として立てて、その主体の教育活動の意義や革命的精神を語るような研究態度とは一線を画するのである。そういう視線による研究の登場したことが、松陰研究における現在という新しい状況である。

思想史研究において、対象の内部に徹することで、そしてまた、対象をめぐる実証的事実を丹念に追うことで、実りある成果を生むことはあるし、それは重要なことである。だが、外からの眼差しによって、それまで見えなかつたものが見えることがある。吉田松陰研究だけでなく、日本思想史研究においても、外から見る視線の重要性とインパクトを示したのが、このパネルセッションの意義であったと考える。

(岡山大学教授)